

# 木曾の最期

## 用言助動詞確認テスト①～⑤

年 組 番 名前

次の **a** ～ **d** 傍線部の語（または傍線部が含まれている語）が、**用言**または**補助動詞**の場合はその活用の行・種類と活用形を記し、**助動詞**の場合はその文法的意味と活用形を記しなさい。

- ①今井四郎、木曾殿、主従二騎になつて、のたまひけるは、「日ごろは何とも **a**おぼえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。」②今井四郎申しけるは、「御身もいまだ疲れ **b**させたまはず、御馬も弱り候はず。③何によつてか、一領の御着背長を重うはおぼしめし候ふべき。④それは、御方に御勢が候は **c**ねば、臆病でこそさはおぼしめし **e**候へ。⑤兼平一人候ふとも、余の武者千騎と **e**おぼしめせ。

活用の行・種類又は文法的意味

活用形

活用の行・種類又は文法的意味

活用形

a	c	e
b	d	

# 木曾の最期

## 用言助動詞確認テスト⑥～⑩

年 組 番 名前

次の **a** ～ **d** 傍線部の語（または傍線部が含まれている語）が、**用言**または**補助動詞**の場合はその活用の行・種類と活用形を記し、**助動詞**の場合はその文法的意味と活用形を記しなさい。

- ⑥矢七つ八つ候へば、しばらく防き矢つかまつら **a**ん。⑦あれに **b**見え候ふ、栗津の松原と申す、あの松の中で御自害候へ。」とて、打つて行くほどに、⑧また新手の武者、五十騎ばかり出で **c**来 **d**たり。⑨「君はあの松原へ入らせたまへ。⑩兼平はこのかたき防き候はん。」と申しけ **e**れば、

活用の行・種類又は文法的意味

活用形

活用の行・種類又は文法的意味

活用形

a	c	e
b	d	

/5 点

/5 点

木曾の最期

用言助動詞確認テスト三

⑪～⑮

/5 点

次の a ～ d 傍線部の語（または傍線部が含まれている語）が、**用言または補助動詞**の場合はその活用  
の行・種類と活用形を記し、**助動詞**の場合はその文法的意味と活用形を記しなさい。

⑪ 木曾殿のたまひけるは、「義仲、都にていかにもなるべかり **a** つるが、これまで逃  
れ来るは、なんちと一所で死な **b** んと思ふためなり。⑫ ところどころで討たれんよ  
りも、ひとところどこそ討ち死にをも **c** せめ。」とて、馬の鼻を並べて駆けんとした  
まへば、⑬ 今井四郎、馬より飛び下り、主の馬の口に取りついて申しけるは、⑭ 「弓  
矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最後のとき不覚しつれば、長き疵  
にて **d** 候ふなり。⑮ 御身は **e** 疲れさせたまひて候ふ。

活用の行・種類又は文法的意味

活用形

活用の行・種類又は文法的意味

活用形

e	c	a		
			d	b

木曾の最期

用言助動詞確認テスト四

⑯～⑳

/5 点

次の a ～ d 傍線部の語（または傍線部が含まれている語）が、**用言または補助動詞**の場合はその活用  
の行・種類と活用形を記し、**助動詞**の場合はその文法的意味と活用形を記しなさい。

⑯ 続く勢は候はず。⑰ かたきに押し隔てら **a** れ、言ふかひなき人の郎等に組み落と  
され **b** させたまひて、討たれさせたまひ **c** なば、⑱ 『さばかり日本国に聞こえさせ  
たまひ **d** つる木曾殿をば、それがしが郎等の討ちたてまつたる。』⑲ なんと申さんこ  
とこそ、**e** くちをしう候へ。⑳ ただあの松原へ入らせたまへ。」と申しければ、

活用の行・種類又は文法的意味

活用形

活用の行・種類又は文法的意味

活用形

e	c	a		
			d	b